

長野県上伊那地域における奉納煙火の現代的変容

坂本優紀*・渡辺隼矢**・山下亜紀郎***

*西武文理大学サービス経営学部, **公益財団法人九州経済調査協会, ***筑波大学生命環境系

本稿では、長野県上伊那地域でみられる筒系噴出煙火の三国を地域文化として捉え、三国の伝播と利用形態の変容を明らかにした。伊那谷における三国は江戸時代に三河地方から伝わったとされ、各地域の神社の祭りで奉納されるようになった。現代でも駒ヶ根市以南では、主に神社の秋祭りで奉納され神事としての役割を担っている。第二次世界大戦後になると三国の利用地域が拡大し、それまで三国の北限であった駒ヶ根市より北にある宮田村と箕輪町で三国が放揚され始めた。宮田村では1962年に在来の祭礼に組み込まれる形で三国が奉納されるようになった。当初は祭礼を盛り上げることが目的であったものの、現在では神事としての意義づけがされている。一方、箕輪町では2000年代に地域イベントで放揚され始め、現在も神事としての役割はない。このように三国の拡大過程においてその意義づけは対象地域ごとに異なり、各地域それぞれの選択と解釈がなされていることが明らかとなった。

キーワード：煙火、文化、三国、神事、文化伝播、長野県上伊那地域

I はじめに

1. 研究の背景と目的

日本に煙火の技術が入ってきたのは、戦国時代と伝えられている。当初は狼煙として使用されていたが、火薬技術の発展に伴い、戦争で使用されるようになっていった(泉谷, 2010)。その後、江戸時代に入ると神社の祭礼に奉納する風習が奨励され、氏子であった農民や町民に煙火の製造を担わせたことから全国的に煙火が広がったと考えられている(櫻井, 2014)。

江戸時代において煙火は奉納物としての役割を担っていたが、現代ではその役割が低下し、花火大会などのイベントの利用が主となっている。そのような状況の中、現在でも奉納物として煙火を放揚している地域の存在が認められる。その一つとして、本稿で対象とする長野県の伊那谷¹⁾があげられる。伊那谷では現在も多くの神社で三国(さんごく)と呼ばれる筒系の噴出煙火が放揚されている。三国は特に秋祭りでの放揚が多く、伊

那谷の秋を彩る一つの要素となっている。江戸時代は、各町内あるいは各家で煙火を手作りしていたが、明治時代以降の火薬類に関する法律の制定や煙火の暴発事故などにより、煙火は主に専門業者が製造するようになった(武藤, 2001)。しかし、現在でも氏子らの煙火に対する想いは熱く、住民が花火師の資格をとって煙火製造に励む長野県阿智村清内路(坂口, 2010)や、三国の筒に火薬を充填する作業を氏子が担う地域もある。また氏子集団によって三国の色や噴出のタイミングなど細かい注文が業者に伝えられることもある。このように三国は伊那谷の祭りに欠かせないものであり²⁾、伊那谷の祭りを特徴づけ、地域文化³⁾を際立たせる一要素となっている。

このような伊那谷の三国放揚を一つの文化として捉えても、その実態は各放揚主体によって異なっている。特に近年、三国やその放揚を奉納物あるいは神事として扱わない事例も登場し、伊那谷における三国の新たな利用形態と文化の伝播がみられる。